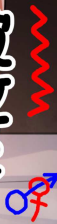


● ● ● ● ●
イケメン親友の彼女に



顔

だっぴんぐーんわいん

体験版

≠
←○

☆

←ご自由に♡

文:砂部岩延
絵:右野

誰でも♡♡♡
たまふり文庫



メモ

目次

1	イケメンの情事	1
2	前戯（キス、クンニ）	18
3	本番（正常位、種付けプレス）	39 （製品版のみ）
4	アへ顔ダブルピース	62 （製品版のみ）

1 イケメンの情事

陰キャでオタクの男子高校生、山田やまだ一樹かずきには、幼なじみが二人いる。

一人は、今まさに斜め向かいの座席で鼻歌交じりに帰りの支度をしている男子生徒——藤原ふじわら悠真ゆうま。

爽やかな顔立ちに、年齢平均より頭半分ほど抜けた背丈、ノリが良く裏表のない性格で、スポーツも学業も優秀という、完璧すぎるイケメンだ。

幼い頃からの遊び仲間であり、小中高と同じ学校に通う腐れ縁であり、そして無二の親友でもある。

そんな悠真は、いつもつるんでいる陽キャグループからの誘いを珍しく断って、やけに上機嫌で机の中身を通学鞆に移していた。

「……楽しそうだな、悠真」

「おー、まあな！ 今からデートでさ。駅前のちよつと入ったところに、めっちゃオシャレなカフェ出来たの知ってるか？ まだあんまり知られてない穴場らしいんだよ」

イケメンの悠真には、それにふさわしい彼女がいる。デートと言えば当然、その彼女と行くように思われる

が、親友の性根をよく知る一樹は、冷やかな視線を向けた。

「それ、もちろん陽菜と行くんだよね？」

「悠真の動きがピタリと止まる。」

しばし間があつて、悠真は勢いよく振り返り、拝むように手をあわせてくる。

「頼む、見逃してくれ！ あのフェラス女子学院の女の子なんだ。超お嬢様だぞ？ この機会を逃したら一生

出会えないかもしれない!!」

スペック上は完璧すぎるほど完璧なイケメン親友の、最大最悪の欠点。

それは、下半身が恐ろしくだらしないことだ。

好みの女の子から誘われると、脊髄反射でホイホイついていってしまう。

成績はいいはずなのに、欲望に忠実すぎて、チンコが脳みそになっているとしか思えない。

「バレたらまたケンカになるぞ」

「待て、聞いてくれ。そもそも今日は一緒にお茶をするだけだ。その後でカラオケとかは行くかもだが、べつにやましいことは無い」

キメ顔で自己弁護する悠真を、一樹は半眼で見る。

「俺に言ってどうすんだ。自分でカノジョに言えよ」

「……いやあ」

途端に情けない顔で、にへらと笑う。

「さすがに、ほら、なんていうか、なあ？ わかるだろ？」

分かりたくないのに分かってしまうのが、親友の親友たる所以ゆえんだろうか。

つい先月も悠真は、一学年上の先輩と、体育倉庫で筒に棒を出し入れする秘密の体育をしたのがバレて、彼女と喧嘩になった。

だいたい、一度や二度の話ではない。

過去に何度も浮気をしては、彼女と喧嘩になり、その度に仲裁を求めて泣きついてくる、というのが定番の流れになりつつある。

いい加減、肩を持つ気にもなれない。

「今度こそ、どうなっても知らないからな。俺は」

「ダイジョブ、ホント、ナニもないって。あ、でも、もしなんか聞かれたら、うまく誤魔化しといてくれよな。また合コン、セッティングするからさ。んじや！」

鞆を小脇に抱え、どことなくザコっぽさを漂わせながら、悠真はそそくさと教室を出ていった。

可愛い彼女がいて、どうしてそこまで他の女とやりたがるのか。

非モテでオタクの一樹には、一生理解できそうにない。

(まあ、イケメンにはイケメンの、オタクにはオタクの生き方があるってことだ)

一樹は机の中からノートと教科書、そしていつも肌見放さず持ち歩いている愛用のタブレットを取り出して、カバンに移す。この薄くて四角い板の中に詰まっている肌色過多なイラストや動画こそが、一樹の愛する嫁であり、生き甲斐だった。

(今さら3次元の女に、夢や希望など抱いてないさ)

などと胸の内であそぶきつつ、一樹は鞆を手に席を立つ。

「……あ。一樹、待って！」

教室の入り口から、女子生徒に声をかけられる。

肩の上で切りそろえた栗毛色の髪に、ぱっちりとした二重の瞳、すつと通った鼻筋、小ぶりな桜色の唇。

そして、何よりも目立つのが、制服のシャツを押し上げる巨大な二つのふくらみだ。一步踏み出すごとに、ゆさゆさと重たげに弾んでいる。それでいて、腰まわりは細く、スカートに隠された肉つきの良いお尻から、

健康的な太ももへのラインが、非常にエロい。

四ダースーセットのアイドルグループでセンターを張るくらいの可愛らしい顔と、グラビアアイドル並に男好きする身体をした美少女——朝倉陽菜。あさくらひな

一樹のもう一人の幼なじみで、そしてあのイケメン親友の彼女だ。

「悠真どこ行ったか知らない？　もしかして帰っちゃった？」

「ついさっきな」

「えー？　今日、一緒に帰る約束してたのに。いい加減なんだから」

顔をむくれさせて、ため息をつく。

「悠真ってそういうとこ、全然変わんないよね。いつもテキトーっていうか、ナニも考えてないっていうか」
怒っているようで「だから、私がいてあげなきゃ」とでも言いたげな気配に、胸焼けがしそうだ。

一樹と二人の幼なじみは、家のごく近所で、しかも同学年とあって、幼少期より家族ぐるみの付き合いが多かった。今でも、花見やバーベキューなど、季節ごとのイベントではよく集まっている。

面倒見が良く世話焼きな陽菜は、三人の中でお姉さんのポジションであり、男二人は手のかかる弟同然に見られていた。

関係性が変化したのは、中学に上がってすぐの頃だ。

わりとチビだった悠真がすくすくと背を伸ばして、見事なイケメンになるや、陽菜の見る目が変わった。もともと気心知れた相手だったため、それが恋心となるまで、たいして時間はかからなかった。悠真にとっても陽菜は初恋の相手で、二人はごく自然な流れで付き合い始めた。

「ま、いいや。一樹はこの後ヒマ？　ちよつと行きたいところあるから、付き合ってよ」

ちなみに、取り残されたもうひとりの弟分は、身長もそこそこ、運動も勉強もそこそこ、見た目と性格は地味とあって、今でも永遠の弟ポジションだ。

「はいはい。で、どこ行くなって？」

「駅前の少し入り組んだとこに、すぐくオシャレなカフェが出来てるの見つけたんだよね。まだあんまり知られてないみたいだし、今のうちに行っておきたくて」

どこかで聞いたような話に、思わず天井を仰ぐ。

「あー……それは、悠真と行くまで取つといたら？」

「まあ、最初はそのつもりだったんだけど」

陽菜は照れたように笑って、

「やっぱり、下見くらいはしとこうかなって。実際行ってみて微妙だったら、気まずいでしょ？」
陽菜の健気な発言に、一樹の胸が痛む。

こんなにも想われているというのに、あのイケメンヤリチンときたら、彼女から教えてもらったデートスポットを他の女とのデートに使うとか、一体どういう神経をしているのか。モゲればいいのに、と一樹は胸のうちで真剣に願った。

「それで、男の子の意見も聞きたいんだけど、ダメかな？」

伺うように見上げる瞳に、思わずドキリとする。

親友の彼女をオンナとして意識してしまい、気まずさから視線をそらす。

「いやまあ、ダメってことはないんだけど」

「煮えきらないなー。じゃあ、どーゆう……」

と、そこで陽菜の顔から、ストーンと表情が抜け落ちた。

「……もしかして、また？」

「あー、いや……」

みるみるうちにキレ上がっていく眼尻を見て、誤魔化せそうにないと悟る。

「……一緒にご飯食べるだけ、とは言ってたけど」

「それ、前にもおんなじこと言って、ナニしてたか知ってるよね？」

抜身のドスのような声色に、思わず身震いする。

「いいよ。わかった。じゃあ、確かめに行こ」

断る間もなく、手首を掴んで引きづられ、彼氏の尾行へと強制連行された。

§ § §

「ここのケーキ、すつごく美味しいです♪」

「内装も可愛くてオシャレですね〜」

「こんなステキなお店を知ってるなんて、さすが悠真さん♡」

「いやあ〜、喜んでもらえたなら良かったよ」

甘ったるい女子の声が三人分と、どこかだらしなないイケメンの声が、明るく華やかな店内にひっそりと響く。

「……ここ……教えたの……私……」

対して、一樹の隣の席からは、地獄の底から響くようなおどろおどろしい怨嗟の聲が上がってくる。

例の喫茶店で悠真たちの姿を見つけ、近くの席にこっそりと陣取ってから、およそ1時間ほど。

彼らは終始この調子で、互いへの好意と情欲を塗り合う言葉のセックスを交わし、陽菜のソウルジ〇ムをどす黒く濁らせ続けている。

国内有数のお嬢様校の生徒とあって、三人は見るからに育ちが良く、そして自分の魅せ方をよく心得ていた。髪の毛から爪の先まで隙なく整えられ、化粧は控えめだが上品で、さりげなく身につけている装飾品から通学鞆に至るまで、えらくお金がかかっているのは、素人目にもわかる。とても同じ高校生には見えない。

おかげで陽菜の女としてのプライドはゴリゴリと削られ、その瞳はすっかり月の出ない夜道みたいになっている。

秒単位で深度を増していく闇の波動を身体の側面に感じながら、一樹は空になって久しいカップを無心で口元に傾け続けた。

ほどなくして、四人が席を立った。

少し時間を置いて、一樹たちも店を出る。

まだ陽も高く明るい繁華街を、イケメンとお嬢様JKたちは団子のようになって歩いていく。

あいかわらず陽菜は死んだ魚のような目で彼らを見つめているが、正直なところ、一樹は少しほっとしていた。

あの悠真のことだから、女の子と二人きりでお茶して、あとは本能のままにホテルでパコパコやるのだろうと思っていた。しかし、蓋を開けてみれば、相手は三人もいて、しかも初対面のようだし、今日のところはせいぜいカラオケにでも行って終わりだろう。結局は、悠真の自己申告通りだった、ということだ。

(アイツも、少しは反省してるのかもな)

そんなことをしみじみ思っていると、前を歩く四人が別の路地に入った。

さらに二度、三度と道を曲がるたびに、辺りからひとの気配が遠のいていく。そして、四人は「ご休憩」やら「フリータイム」の文字が踊る小綺麗な建物の中に、しれっと入って行った。

「うわぁ……マジか」

当然のように可能性から除外していた「初対面で4Pする」という離れ業を平然とやってのけたイケメンに、感心とも呆れともつかない声が漏れてしまう。

隣に立つ陽菜は、もはや「無」だった。

能面のような顔に闇のような瞳で、一言も発することなく、その建物に向かって歩いていく。

一樹は何も言えず、黙って後をついていく。

ラブホテルの中は薄暗く、閉塞的で、清潔感がありながらも、どこか退廃的な空気が感じられた。

一樹が童貞らしくまごついてみると、陽菜は四人が乗ったエレベーターの停止階を確かめ、巨大な部屋パネルの点灯状況から彼らの部屋を割り出し、さっさと隣の部屋の鍵を確保する。

あきらかにラブホ慣れしたその振る舞いに、一樹はモヤモヤとしつつ、陽菜の後に続く。

エレベーターで階を上がり、狭く息苦しい廊下を歩いて、目的の部屋に入った。

薄暗く淫靡な照明と、むせかえるようなムスクの香り、そして誤魔化しきれない、ケモノじみた淫臭の残り香に迎えられる。入ってすぐ、部屋の中央には、面積の半分近くを占める巨大なベッドが置かれ、否が応でもこの場所の用途を意識させる。

陽菜は何の躊躇もなくベッドに向かうと、靴を脱ぎすてて乗り上がり、ベッドボードと接した壁——隣部屋に面している——に這い寄る。四つん這いのためスカートの裾がかなり危うく、一樹は吸い寄せられる視線を、なけなしの理性で引き剥がす。

親友の彼女であり、幼い頃からよく見知った家族同然の相手とはいえ、ラブホの部屋で二人きりとなれば意識しない方が難しい。

当の陽菜と言えば、そんなことなどお構いなしに、ヤモリのように壁に貼り付いて、一心不乱に聞き耳を立てている。

一樹は小さくため息をついて、同じように靴を脱ぎ、ベッドに上がると、陽菜の隣で壁に耳を押し当てた。

「ちゅっ♡　ちゅっ♡　ちゅっ♡　ちゅっ♡　ちゅっ♡」

「ああん♡　悠真さあん♡」

「ずるいよお♡　わたしもお♡」

たっぷりと媚びを含んだ女子の声、しっかり三人分聞こえてくる。呆れながらも身体の一部が反応しかけて、一樹は慌てて壁から耳を離れた。

陽菜もまたすでに壁際から離れていて、ベッドのただ中で俯き座り込んでいた。洗いたてのシーツを見つめるその瞳は、まるで果てなき宇宙の深淵を映しているようだ。

「…………やる…………シてやる…………」

すっかり乾ききった唇が、繰り返し呪詛を紡いでいる。

恐ろしくて聞きたくないが、かといって無視もできない。

一樹はベッドの上をにじり寄り、そつと耳を傾ける。

「……浮気シてやる……私も浮気シてやる……」

ひとまず刃傷沙汰にはならなそうで、ほっとする。

しかし、逆にここまできて、その程度のことの良いのか。

「やっぱり、別れたりはしないんだ？」

すると、無だった表情に、やや気まずそうな気色が浮かぶ。

「だって……そうだったら、気まずいでしょ？ 家も近いんだし、家族同士で集まることも、結構あるし」

「そのへんは別れ方次第じゃない？ ケンカ別れじゃなくて、悠真の好きにさせてあげる、みたいな感じで……」

……まあ、それはそれでムカつくだろうけど」

「それは、べつに……でも……」

快活な陽菜にしては珍しく、モゴモゴと口ごもる。

だいたい、最後はいつもこんな感じだ。

悠真の浮気に怒ってはみせるが、決して別れ話を切り出したりはしない。

(結局、それでも好きってことなんだろうな)

初対面の女子とラブホで4Pという頭のおかしい浮気をされても、それでも別れがたいと思わせる。羨まし

すぎて、憤死してしまいそうだ。

「もういいの。ほっといて。私、今から浮気する。ピアス空けまくった金髪のチャラそうな男の人とか、お腹が出て髪の毛も薄くなった小太りのオジサンとか、スキンヘッドでムキムキマッチョな黒人の男性とかとエッチして、両手でピースしてる動画をアイツに送りつけてやるんだから」

「……陽菜って、そういうの詳しかったっけ？」

イベント3日目の薄い本にありそうな内容だが、陽菜はもちろん悠真もそういうオタク趣味とは無縁だったはずだ。

「一樹のタブレットに入ってるの、たまに見てたから」

「は……？ え……ちょ……」

「する時の参考になるかと思って。一樹がいつも、そういうの見るのは知ってたから。悪いとは思ったんだけど、自分で買うのはちょっと怖くて……ごめんね」

「いや……え……？」

「でも、勝手に見るとしてアレだけど、ああいうのはあんまり良くないと思う。女の子にヒドイことする、みたいな。あと、誕生日をパスワードに使うのもやめたほうがいいよ。それが自分のじゃなくても。私は、べつ

に気にしてないけど」

「ア……ハイ……」

愛用のタブレットに詰め込まれた秘蔵データをすべて見られていた挙げ句、性癖にダメ出しまでされ、さらにはパスワードの秘密も知られていたとわかって、一樹の心のライフがゼロになる。

レイプ目でベッドに崩れ落ちる一樹を尻目に、陽菜はせつせと自分のスマホにマッチングアプリをダウンロードして、お相手の男の物色を始めている。その唇から時折「イチゴ」や「ホ別」「ワリキリ」「ケイゾク」などの単語が漏れ聞こえてきて、とても不穏だ。

(……本当にやる気なのか……？ 今から……見ず知らずの男たちと……)

軽薄そうなギャル男とか、臭そうな中年汚ヤジとか、野獣のごときマッチョ黒人に、陽菜がやられてしまう。好きだとか、イケメンだからとか関係なく、浮気した彼氏への仕返しのためだけに、他の男に股を開く。逆立ちをしても勝てそうにない完璧イケメンではなくて、あくまでもそのへんにいそうな男たちと。

だったら――

それだったら――

「――俺でも、いいのに」

「……え？」

思わず漏らした一樹の呟きに、陽菜が訝しげな顔をする。

「……一樹と？」

陽菜は手元のスマホに映った男たちと、目の前の弟みたいな幼なじみとを見比べる。

「……たしかに、知らない人とするよりは……」

そう呟いてから、陽菜は少し気まずげに視線を外す。ほんのりと目元が赤らみ、どこか据わりが悪そうに、そわそわとしている。

今さらながらに、ここがドコで、ナニをする場所で、そして目の前にいる男の子が、弟などではなくセックスできる相手だと、気づいたらしかった。

「でも、一樹はいいの？ 私と……そういうこと、できる？」

「そりゃ……陽菜はカワイイから、するとなったら……嬉しいよ」

陽菜はいよいよ顔を赤らめて、俯いてしまう。

そんな幼なじみの顔を見つめながら、一樹の心臓も、痛いくらいに脈打っていた。

陽菜のことは、小さい頃からよく知っている。

明るくて、世話焼きで、しっかりしているようで、意外と年相応なところもあり、面食いだったり、流行りモノに憧れたりもする。

そんなところも含めて、一樹はずっと、陽菜のことが好きだった。

2 前戯（キス、クンニ）

一樹がベッドの上に座り直す。

ベッドのスプリングがギシリと軋み、陽菜の肩がぴくりと跳ねる。

二人はなぜかベッドの上に正座して、一メートルばかりの距離から互いの顔をチラチラと伺い合う。

そんな状況を打ち破ったのは、隣の部屋から漏れ聞こえてきた声だった。

「ああん♡ あん♡ あん♡ 悠真さあん♡ キモチイよお♡」

まるでAVみたいな喘ぎ声に、陽菜の目が据わる。

今まさに壁一つ向こうで彼氏が浮気（4P）しているという事実には背中を押され、陽菜はベッドの上をにじり進んで、一樹と膝がくっつく距離まで迫る。

「一樹は……初めて、だよね？」

「まあ……うん」

その何気ない問いかけに、一樹の胸が鈍く痛む。

陽菜と悠真は、セックスをしている。

二年もの間、恋人として付き合ってきたのだから当然だ。しかも、グラビアアイドル並みにエロい身体をした陽菜が相手となれば、あのチンコが服を着て歩いているような悠真がただのセックスで満足できたとは思えない。きつと口にするのものはわかるような、変態的で淫らな行為をやりまくってきたのだろう。

対して一樹はと言えば、エロゲやエロ同人、AVなどで画面越しに架空のセックスを眺め、使うあてもないのにハウツー本を読み漁り、永遠の自主トレーニングに励んできたただけだ。

知識はともかくとして、経験の差は歴然だった。

「じゃあ……目、つぶって」

一樹は、変に意地や見栄を張らず、言われたまま、まぶたをとじた。

シーツの擦れる音がした。

陽菜の気配が、より強くなって――

「……ちゅっ」

温かく、柔らかいものが、唇に触れた。

「ちゅ、ちゅっ……んっ、ちゅ、ちゅっ、ちゅうっ……」

しっとりとした弾力が、二度、三度と押しつけられ、軽く吸い付いてくる。

生まれて初めての甘美な感触に、一樹の腰のあたりがじんわりと痺れる。

ずっと好きだった女の子と、親友の彼女と、キスをしている、その喜びと背徳感。

「あ……んっ……ちゅっ、ちゅ……」

重ねた唇から漏れる艶めいた声。じんわりと伝わる体温。息遣い。

甘酸っぱくも、どこか生々しい、雨上がりの花のような香り。

閉じたまぶたの向こうが、陽菜の存在でいっぱいになる。

一樹は誘惑に抗いきれず、うっすらと目を開ける。

「ちゅ……ちゅっ……ん……ちゅ……は、あ……」

そっと閉じられた陽菜のまぶたの縁で、長いまつ毛が震えている。

形の良い眉は悩ましげにひそめられ、頬はほんのりと上気している。

初めて見る幼なじみのキス顔は、例えようもなく、色っぽくて、エッチだった。

「ん……ぺろっ……ちろっ……れるっ……」

濡れた柔らかな感触が、ひかえめに唇の上を撫でていく。

小さな桜色の唇から、赤い舌がちろりちろりとのぞく。

一樹もまた、舌を出す。

「あっ……♡ん……れるっ……ねるっ……れちゅっ……ねりゅっ、れちゅっ……んっ、ふううう……♡」
触れた舌尖が、一瞬、ためらうように震えて、やがてゆっくりと絡んでくる。

鋭敏な粘膜と粘膜とで、お互いのカタチを確かめるように、まさぐりあう。

唾液に濡れた柔らかな舌が擦れ合う快感に、二人は徐々に夢中になって、相手の舌を絡ませ、吸い、ねぶる。

「れっ……れりゅっ、れるっ……んっ、あ……♡れちゅっ、ねるっ、れるうっ……んふううっ……♡」
鼻にかかった甘い声を漏らしつつ、陽菜も積極的に舌を絡ませてくる。

五分、十分と際限なく、ヘビの交尾のようなキスを続け、粘膜同士が擦れ合う快感を互いに貪る。

もはや舌を絡めて唾液をすすり合うことに、お互い遠慮もぎこちなさもなくなった頃、どちらともなく唇が離れた。

「はあ……♡はあ……♡ん……♡ふうう……♡」

濡れて光る桜色の唇から、艶めかしい吐息がこぼれる。

半開きのまぶたの下から、とろりとした瞳で一樹を熱っぽく見つめていたが、ふいにハッとなって、恥ずか

しげに顔をうつむけた。

それからちよつとむくれて、睨めつけてくる。

「……初めてって、言ってなかった？」

「そうだけど……なんか、変だった？」

「変じゃ、ないけど……」

陽菜はまた赤い顔で俯いてしまう。

「……やっぱり、ああいうの読んてるから……？　でも、悠真の時は……」

下を向きながら、何かごによごによ言っているが、思ったより悪い反応ではなさそうだ。

数多のエロコンテンツと、ハウツー本と、脳内妄想にて行われた、長い長い自主練は、ムダじゃなかったのかもしれない。

密かな喜びと自信に後押しされて、一樹はもう少し、大胆になってみることにした。

「陽菜……」

名前を呼んで、ゆっくり顔を寄せていく。

陽菜はぴくりと肩を震わせて、恥ずかしそうにしながらも、顔を上げ、瞳を閉じる。

差し出された幼なじみの唇に、今度は一樹から、唇を重ねる。

「ん………♡ ちゅ………ちゅっ、ちゅ………あ………♡」

優しく、ついばむように、それから徐々に、重なりを深くしていく。

「んれっ………れるっ………んっ、ふう………♡ ちゅれっ、れりゅっ、ねるっ、れるううっ………あふうっ………♡」

瞳を閉じ、頬を赤らめ、半開きの唇から舌を差出して、キスをしてくる。

片思いの相手の無防備なキス顔に、一樹はたまらず、そろえた指の背を刷毛のようにして、ほんのりと薄紅色に染まるすべらかな頬から、耳の方へと撫で擦る。

「んふあああっ………♡」

鼻にかかった甘い声とともに、陽菜の身体がぶるりと震えた。

閉じていたまぶたが薄く開く。

咎められるかと思いきや、うっとり熱っぽい瞳は、むしろもつとねだるように一樹の瞳を見つめ続ける。

再び、頬から耳へ。さらに首筋を下りて、鎖骨の上を撫でる。触れるか触れないかの愛撫を繰り返しつつ、

陽菜の唇から舌をねじ込む。

「んぶあああっ………♡ れるっ、れちゅるっ………あふううっ………♡ ねりゅっ、れりゅっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ

……あふああつ……♡」

陽菜は口内に差し込まれた一樹の舌を、嫌がるどころか進んで受け入れる。唇をすぼめてしゃぶりつき、暴れまわる舌をなだめるように舐め擦る。

頬どころか耳の端から首筋までがすっかり赤く染まり、一樹の愛撫を受けるたびに、甘い鼻声を上げて、ぞくぞくと身体を震わせている。

一樹は肩から二の腕を撫で下ろすと、陽菜の持つ巨大で柔らかかなふくらみに、そつと指で触れる。

「っ……♡」

陽菜の身体がこわばる。

その緊張を解きほぐすように、まだあからさまな部分には触れず、横から下へ、珠を撫でるように愛撫する。深くキスをしながら、脇から胸の下にかけてあるという性感帯を、じつくりと刺激していく。

「れるっ、ぬじゅっ、れりゅりゅっ……んはあつ……♡ れりゅっ、ねるっ、れちゆるっ……あふうっ……♡」

予想とは異なる部分を、優しく撫で擦られ、陽菜の身体から再び力が抜けていく。

そこを見計らって、揺れ弾む巨大なゴムボールを、下からすくい上げるように手を添え、さらに丹念に撫で回す。

「んああっ……♡ はあううっ……♡ んんんっ……♡ あっ……んはああああっ♡」

唇が離れ、甲高く甘い声がラブホの室内に響き渡る。

陽菜はハツとして口元に手を添え、恥ずかしげに顔を背ける。

その耳まで真っ赤になった横顔を眺めながら、一樹は両手の指を大きく広げて、左右の山をそれぞれに包み込む。指全体を使って、じわりじわりと揉みほぐしていく。

「んっ♡ んううっ……♡ あっ、んんっ、くふうううっ……♡」

陽菜の反応を確かめながら、一樹は少しずつ触り方を変え、より良い反応を引き出すように試みていく。か細く抜ける鼻声は、やがて、口元を押さえた指の合間から絶えず漏れ聞こえるところけ声に変わる。

「はああっ……♡ んううっ、んはああうっ……♡ あっ、はああっ、んああっ……♡ あふあああっ……♡」

陽菜の体からはすっかり力が抜けて、胸を揉みしだく一樹にすべてを明け渡し、委ねている。

そろそろ良いかと、一樹は胸を揉みしだきつつ、人差し指の先を胸の中ほどにあてがう。

服越しでもわかるほどに固くシコったソレに爪先をあてがい、優しく、ひっかく。

「あっ♡」

強い快感の声が上がリ、陽菜の背が浅く仰け反る。

突き出された胸をこねるように揉みしだきながら、二つの蕾を爪先で刺激していく。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ そこっ、なんでっ……んくっ♡ くふうっ♡ んふううっ♡」

陽菜は戸惑いの声を上げながら、艶やかな桜色の唇に強く指を押し当て、もう一方の手で、すがるように一樹のシャツの袖を掴んでくる。

甘美な刺激を受けて服の下でピンピンに勃起した陽菜の乳首を、指の腹で、同時に押し込む。

「あっ、ふうううううんっ♡」

顎が上がり、白い喉を晒しながら、とろけるような甘い声が漏れる。

「あっ♡ あああんっ♡ それえっ♡ 乳首っ♡ ぐりぐりいっ♡ ダメえっ♡ はああんっ♡ 気持ち、い

っ♡♡」

乳首と乳房への愛撫を続けながら、シャツのボタンを外していく。

ふとした思いつきで、一樹はシャツはそのままにブラのホックを外し、肩紐を左右の袖から抜いて、ブラだけを取り去る。

「っ……♡ この、格好……♡」

桜色の突起が二つの山の頂で、ピンとシャツの布地を押し上げ、薄っすらと透けている。

ボタンの外れたシャツの合わせからは、たっぷりとした巨大なマシュマロと、その深い谷間、そしてなだらかな腹部が見えている。

陽菜は恥ずかしそうに顔を背けながらも、身体は隠さず、一樹の視線に晒し続ける。

シャツの下に手を入れて、今度は直に、二つのふくらみを揉みしだく。

薄手のシャツの合間で、巨大なマシュマロおっぱいは、先程よりも自由にその形を変えていく。

「あっ……♡ やっ、んんっ……♡ はああっ……♡」

しっとり汗ばんだ肌は手のひらに吸い付くようで、どこまでも指が埋まっていきそうな柔らかさと、それを押し返すしつかりした弾力があった。

服越しとは異なる生おっぱいの感触に一樹は夢中になって、揉みしだく。

「んふああっ……♡ あっ……♡ んんうっ……♡ はあううっ……♡」

愛撫のうちに陽菜の裸シャツはすつかりとはだけで、白磁のようなつややかな肌がラブホの淫靡な明かりの下に晒されている。

もっちりとした白いふくらみはうっすらと紅調して、一樹の手の形に色づいている。

ツンツンと勃ち上がった綺麗な桜色の蕾をわざと避けて、色の異なる境目を指先でくすぐるようになぞる。

「んっ、んっ……♡ んんううっ……♡ んあっ……やあああっ……♡」
焦らされた乳首はさらに固く尖り、乳輪ごとぷっくりと持ち上がってくる。

刺激を求めて卑猥なまでに勃起した母性の象徴に、一樹は唇を寄せ、おもむろに吸い付く。

——ちゅううううっ！

「あああああっ！♡」

陽菜の顎が上がり、胸が反る。

吸いついた乳首を、唇でシゴき、舌で先端をねぶり、前後左右に弾き、押しつぶすようにこね回す。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ やあっ♡ それえっ♡ ふあああんっ♡」

もう一方の乳首は指先でつまみ、指の間でくりくりと転がしたり、乳輪ごと指でピンと広げたところをさすったり、逆に寄せてあげた先端を指先で優しくカリカリとひっかいたりする。

「あああああっ♡ ああっ♡ あっ♡ ああああんっ♡ すごいっ♡ きもちいいっ♡ 乳首っ♡ きもちいいっ♡ あああああっ♡」

もはや声を抑えることもせず、陽菜は両手で一樹の頭を掻き抱き、すがっている。

童貞の自分でも、陽菜を感じさせている。

達成感を得ながらも、同時に、この感じやすさはおそらく、悠真との二年間のセックスの賜物なのだろうと思つた。きつと乳首だけではなく、陽菜の身体のありとあらゆる性感帯は、悠真によって開発され尽くし、今こうして見せている以上の淫らな姿を、最愛の彼氏の前では晒しているのだろう。

腹の底にわだかまる暗い感情のまま、一樹は吸い上げた固いシコりに、歯を立て噛みついた。

「あっひいひいひいひいっ!?♡♡♡」

陽菜の背が大きくのけぞり、頭に回された腕に力がこもる。

突き飛ばされるかと思いきや、むしろより強い力で頭を抱かれ、甲高く甘い声で鳴いている。

試しにそのまま、歯の間に捕らえた真っ赤なグミを、二度、三度とやんわり噛みしめる。

「ひぐううううっ♡ あっくうううんっ♡ ダメええっ♡ 乳首いつ、あひうううっ♡ 食べちゃダメえええ

えっ♡」

ダメと言いながらも、さらに甘い声で鳴き、やわらかな乳房をぐりぐりと顔に押し付けてくる。

鼻を塞がれてやや呼吸困難に陥りながら、一樹は歯の間に挟んだ乳首を、横に転がす。

「あひうううううっ♡ それダメっ♡ ダメっ♡ あっあっあっあっ♡ ダメえええ~~~~っ♡♡♡」

一層キツく頭を抱きしめながら、陽菜の身体がびくびくと痙攣する。

1分ほどもそうしてから、ようやく腕の力がゆるんだ。

「はあっ……♡ はあっ……♡ はあっ……♡」

口を離すと、唾液に濡れた乳首が充血して、まるで木苺のように勃起していた。

陽菜の顔は熱に浮かされたように真っ赤に染まり、潤みきった瞳は焦点を失って宙を見つめている。

「もしかして、いった？」

陽菜は目をとろんとさせたまま、ぼんやりと首をかしげる。

まるで初めて絶頂したかのような反応だが、二年もあのスケベな親友とセックスをしていて、一度もいったことがないとは考えにくかった。

(というか、乳首を嘔まれていくって……陽菜はMなのか?)

いつもの明るく朗らかな姿とのギャップに背德的な興奮を覚えるも、それもまた彼氏に仕込まれた性癖なのかと思えば、再び胸の内に暗い嫉妬の火が燃え広がる。

まだぼんやりとしている陽菜のおとがいに手を添えて、唇を寄せる。陽菜は喜んで顎を上げ、唇を押し付けて、舌を差し出してくる。

「んっ♡ んちゅっ、れっ、れるっ、ねりゅっ……かず、き……♡ れちゅっ、ねるっ、れるうっ♡」

艶めかしい吐息とともに囁かれた名前が、胸の内をくすぐる。昂ぶる欲望のまま、キスをしながら、両手で太ももにふれる。

「あっ……♡ んれっ、れるっ、ねぢゅっ、れちゆるっ……♡」

すでに緩みかけていた脚の閉じが完全に弛緩して、誘うように控えめに左右に開かれる。

スカートの裾から手を差し入れると、内ももはじつとりと熱く、蒸れていた。

胸よりも弾力の強く、しつとりと汗ばんだ内ももを揉みしだきながら、さらに奥へと手を差し入れていく。

指の先に、布地の感触が当たった。

同時に、濡れた水音がかすかに耳に届く。

——ちゅくっ

「んんううううっ♡♡♡」

一際甘い鳴き声とともに、陽菜の腰がびくりと跳ねる。

そのまま触れた指を押し付けて、上下に擦る。

——ねちっ、ねちっ、ねちっ

「んっ♡ んっ♡ んっ♡ あっ♡ それっ♡ そこっ、キモチイイっ♡ イイっ♡ れるっ、ねりゅっ、れ

りゆりゆうっ、ちゅぱっ、ちゅっ、ちゅれりゆうっ♡」

両手で首にすがりながら、さきほどよりも情熱的に絡んでくる舌に応えつつ、一樹は手探りで布地の端に指を引っ掛ける。

「んっ……♡ れるっ、れりゆりゆうっ、ちゅぱっ、ちゅっ、ちゅうっ♡」

キスをしながら、陽菜が軽く腰を浮かしてくれる。一樹は両手の指の先に引っ掛けたショーツをゆっくりと引いていき、太ももの上を滑らせて、脚を抜く。

陽菜の背を支えて、ベッドに横たわらせる。

むっちりとした太ももに手を添え、そっと左右に押し広げていく。

「っ……やああっ……♡」

陽菜は恥じらいながらも、抵抗することなく股を開く。

スカートが腰のあたりまでめくれて、汗ばんだ肉つきの良い内ももと、愛液に濡れた秘部が、一樹の目の前に晒け出される。

「一樹い……♡ あんまり、じっと見ないでえ……♡」

薄ぼんやりとした部屋の明かりに、ほころんだ花卉がぬらぬらと濡れ光っている。

まさしく蜜に誘われる虫のように、そのまま顔を寄せようとして――

「きゃあっ！ なっ、なにっ!？」

バツと脚を閉じられてしまう。

「えっと……口でしようと思ったんだけど」

「く、口っ!？」

陽菜はほとんど悲鳴みたいな声を上げる。

「もしかして、悠真はこういうのやらない？」

ぶんぶんと首を横に振っている。

意外なことに、二年も付き合っていてクンニの経験が一度も無いようだ。

あのエロイケメンなら喜んでむしゃぶりつきそうだが、と考えて、いや、悠真はするよりもされる方が好きなかもしれない、と思い直す。

「ええと……口でされるのはイヤ？」

「イヤっていうか……汚いよ……?？」

「陽菜のならそうは思わないし……俺はしてみたんだけど」

「っっっ……っ♡」

陽菜は首から顔までを、かつてないほど真っ赤に染めて、そっぽを向く。

しかし、びったりと閉じていた脚が、ほんの少し緩む。

両手を添えると、力をかけることなく、ゆっくりと左右に開いていく。

今度こそ、陽菜の秘部へと顔を寄せる。

「ううう……恥ずかしい……っ♡」

控えめに開いた割れ目から、とろりと愛液がこぼれ落ちていく。

舌を伸ばして、それをペロりと舐め上げる。

「んふああっ!?!♡♡♡」

がくつと陽菜の身体が仰け反る。

反射的に閉じようとする両脚を手で押さえながら、陽菜の股間に唇と舌を押しあてる。

「あふああんっ♡ ああああっ♡ あっ♡ あっ♡ なにつ、これえっ♡ ふああああんっ♡ すごいっ♡

キモチイイっ♡ すごいっ♡」

舌の上からねっとりとした熱が広がる。

キンモクセイを煮詰めたような味と香りが直接、鼻腔と口内を満たし、その濃厚さに頭がくらりくらする。割れ目の上に、ぷっくりとした突起を見つける。

これがあの有名な……と半ば感動すら覚えながら、一樹は敏感らしいソコに舌先で優しく触れる。

「あふあっ!?♡ あっ♡ やっ♡ それっ♡ なにっ!?♡ あんああっ♡ ひうっ♡ あっ♡ ひああっ♡
そこっ♡ びりびりっ、するうっ♡ あひうううっ♡」

クンニが未経験なら、クリトリスを舐められるのも当然、初めてだろう。

唾液と愛液をたっぷりまぶして、舌先で肉豆を丁寧にねぶる。

「あふああああんっ♡ あふあっ♡ あっ♡ ああああっ♡ すごいいいっ♡ そこっ♡ すごいいいっ♡
キモチイいいっ♡」

最初の恥じらいも忘れて、陽菜は自分から股を開き、より強い快感を求めて尻を浅く持ち上げ、秘部を一樹の顔に押し付けてくる。

クリトリスはカチカチに固くなり、被った皮の下から半分ほど、真っ赤な顔を覗かせている。その上あたりを指で押し込むと、赤い真珠のような姿が剥き出しになる。

おもむろに、唇で吸い付く。

——ちゅっ！

「おひいっ!?♡♡♡♡」

陽菜の背が、ブリッジするように跳ね上がる。

剥き出しの肉豆を強めに吸い上げたまま、敏感な表面を舌尖でほじくるように舐め回す。

「おっ♡ おっ♡ おっ♡ まってっ♡ それっ♡ まってええっ♡ ああああっ♡」

およそ乙女らしからぬ声をあげて、断続的に腰を突き上げる。

よほどコレがお気に召したらしく、開きっぱなしの口の端から涎を垂らして身悶えしている。

さきほどの乳首のことを思い出し、試しにやんわりと、前歯で肉真珠を挟む。

「おっっっっ!!♡♡♡♡」

開いたままの両脚が、ベッドの上でつま先立ちになる。

——プシャッ

口元に、生暖かな液体が吹き付けられた。

軽く潮を吹いたらしい。

挟んだままの突起を、優しく歯でシゴく。

「おおあつつつ~~~~~!!♡♡♡」

腰を浮かせたまま左右に身をよじり、間欠泉のように潮を吹く。

そのまま5分ばかり、クリを歯で刺激し続け、たつぷりとクリイキの快感を味あわせて、口を離す。浮いたままの腰がカクカクと上下に揺れ、やがて糸が切れたように崩れ落ちる。

「~~~~~……♡ はあ……♡ はあ……♡ はあ……♡ つ、ふうう……♡」

強すぎる絶頂の余韻から、陽菜はぐったりとベッドに倒れたまま、荒い呼吸を吐いている。

ボタンの開いた制服のシャツは乱れ、スイカのような二つのふくらみがすっかりまろび出て、ピンと尖った桜色の突起を淫靡なラブホの明かりの下に晒している。

スカートも腰の辺りまでめくれたままで、汗と愛液と潮に濡れた秘部と内もがさらけ出されている。

いつもは明るく朗らかな幼なじみの、淫らに乱れた姿があった。

幼なじみで、親友の恋人で、片思いの相手。

その陽菜が、男として意識してこなかった、弟のような相手に喘がされ、イカされ、ベッドの上でしどけなく横たわっている。

もっと、乱れさせたい。

知識として蓄えるばかりだったセックスの技術を、幼なじみの豊満な身体で試してみたい。

悠真ともシタことのない行為で乱れさせて、「初めて」という名の爪痕を一つでも多く残したい。胸の内でたゆたう暗い衝動のままに、一樹は再び秘部へと口を寄せる。

「っ……♡ ま、待ってえ……♡ もう、これ以上はあ……♡ あひっ♡♡♡」

それから一時間ほど、クンニをし続けた。

(続きは製品版でお楽しみください)

3 本番 (正常位、種付けプレス) 約1万字

4 アへ顔ダブルピース 約3千字